

中国の人を食う妖怪と日本の山姥

逃走譚にみる両者の対応

飯倉照平

はじめに

以前、中国の昔話のなかでもきわめて特徴的な筋立てをもつ〈虎のおばあさん（老虎外婆）〉と〈虎の妖怪（老虎精）〉という二つのタイプの類話を調べたことがある。⁽¹⁾ そのさい、両方の話に出てくる人を食う妖怪が、日本の昔話でも人気のある山姥と、よく似た性格をもっていることを知った。ひどく残忍な行為をするわりには、その実体は明確でなく、しかも行為が具体性を欠き、むしろ母親などが泣く子をおどすさいに引き合いにだす想像上の妖怪に近いところが共通している、と思つた。

もしかすると日本の昔話に出てくる山姥は、日本固有の山の神の信仰（それ自身すでに近隣文化の複合の所産かもしれないが）に由来するに考えるよりも、昔話のキャラクターとして海外から移入され、日本的な変容を受けながら定着したとみる方がいいのではない。その仮定を支持する材料はあるだろうか。

一 中国の人を食う妖怪

日本の〈牛方山姥〉では、山姥が殺されるさいに、釜のなかや木の唐櫃に逃げこむ話が多いが、これとおなじ筋立てが、中国では南方地域に伝わる〈虎のおばあさん〉の亜型（サブタイプ）に見られる。この型の話そのものが、全体として日本との対応関係が大きいことから考へると、偶然の一一致とは思えない。

ここでは、そのような関心から、二つのタイプの昔話の日本との対応関係をたどりながら、中国の人を食う妖怪と日本の山姥の対比を考えてみたい。（このなかには以前の発表のくりかえしになる部分もあるが、一般的な刊行物に掲載されなかつたものもあるので、お許しを願いたい。）

この〈虎のおばあさん〉型と〈虎の妖怪〉型の二つのタイプの昔話には、あとに載せた二つの分布図の資料一覧にあるように、人を食う妖怪がさまざまな呼び名で登場する。

中国語（漢語）では半人半獸の妖怪を「精」と呼び、たとえばブタの妖怪は「猪哥精」と呼ばれる。これを文芸化したものが、『西遊記』の猪八戒である。（中国では猪はアタを意味し、イノシシは野猪と呼ぶ。）この「精」は、人間と会話をかわすことができるし、場合によっては人間と性的交渉をもつこともある。

人を食うわけではないが、日本でこれに近い半人半獸は、たとえば『遠野物語』に見える「猿の経立」であろうか。「女色を好み里の婦人を盗み去ること多し」とあるのは、晋の張華の『博物志』などに出てくる中国の猿の妖怪を思わせる。『博物志』の「猴玃（馬化ともいう）」には、「道を行く婦人に好き者あれば、すなわちこれを盗み去る」とある。（中国には、「野女」または「野婆」と呼ばれる妖怪もあって、これとは逆に、「男子に遇えば、かならず負いて去り、合するを求む」という。本稿では紹介できないが、近年採集された昔話にも、この両タイプの婚姻譚がある。）

『遠野物語小事典』によると、「ふったち」は寿命以上に年を経たために化け物になったものをいうとあり、遠野ではほかに「御犬（狼）の経立」もあるそうで、これも中国の類話に多い「老狼精」に対応している。しかも、『遠野物語』で「猿の経立」が子どもをおどす話にも出てくるというあたりは、たがいに共通している。

中国では、すでに『山海經』に見える「猩猩（猩々）」や「狒狒」が、古くから半人半獸の妖怪として知られていた。現代中国では、それぞれ実在のオランウータンやマントヒヒをさす呼称として使われるようになった用語だが、それまで「猩猩」は犬や猿に似て

いながら顔や足は人のようだとか、「狒狒」は人に似ていながらザンバラ髪で速く走り人を食うとか、さまざまに説明されてきた。明の李時珍の『本草綱目』は、想像上の妖怪までも項目に立て、歴代の記述をまとめ、薬効を述べている。そこでは「猩猩」の項で「野女（野婆）」を副次的に記述し、また「狒狒」の項で「山都」「山獵」「木客」「山猿」を副次的に記述している。

それらの大半は魏晋南北朝時代の「志怪小説」と呼ばれる記録などにはじめて出てくるもので、呼称や特徴はさまざまだが、一言でいえば山のなかにいて人間と何らかの交渉をもつ妖怪である。いまここでそれらの系譜をときほぐす余裕はないが、その延長線上で、もう少し人間に近い（あるいは人間が野性化したもの）と考えられているのが「野人（野女）」や「毛人（毛女）」である。

現代中国で使われる「野人」のさす対象は、たとえばヒマラヤの「イエティ（雪男）」に近い。湖北省神農架での「野人」発見さわぎは、日本のテレビでも放映された。一方、それは時として未開の異民族に対する蔑称としても用いられた。中国の雲南省とビルマとの国境地帯の山地には、以前に人間の首を犠牲として供える風習のあつたジンボー（景頗）族（ビルマ側ではカチン族と呼ぶ）が居住する。かつての漢族は彼らを「野人」とか「山頭」とか呼び、その居住地を「野人山」と名づけた。⁽²⁾

このように中国では、人に危害を与える妖怪は、歴史的にも地域的にもかなり錯綜しているが、ここで取りあげる二つのタイプの昔話の中では、人間の姿に近い「野人精」や「老変婆」も、動物の

化身である「猪哥精」や「老狼精」と、まったく同一線上にある妖怪として扱われている。

二つの分布図の資料一覧に記したように、動物の妖怪では、全体的にはトラが多く、それがここでの話型の命名の理由ともなっている。また北方ではオオカミが多く、南方では「野人」系以外はクマとなっている例が多い。このほかにキツネもよく出てくる。

雲南省のミャオ（苗）族では、死者を埋葬する時に銅鉄の金物を入れてはいけないとされているのに、老人を葬るさいに銅の腕輪を外すのを忘れたためにトラの妖怪に変身した、という説明がタバコの由来を語る昔話にある。また四川省のチヤン（羌）族では、年老いたメスのクマが修練して自在に変身することができるようになると妖怪になる、と語っている。前者はやや特別な解釈で、後者のあたりが一般的な説明であろう。

南方の漢族から辺境地域の少数民族にかけては、「野人外婆」「山人婆」、「老老婆」などの、人間（とくに女性）の姿に近い妖怪がほとんどである。昔話のなかの役割からみると、これらの半人半獸の女性の妖怪は日本の山姥そっくりである。（資料一覧では、半人半獸の女性の妖怪を便宜的に「山姥」と表記し、性別不明のものを「野人」とした。もっともイ（彝）族の昔話につけられた注釈によると「老老婆」は男性をさす場合もあるという。）

この類の妖怪の代表名詞ともなっている「老婆」あるいは「老老婆」は、おそらく少數民族の固有の呼び方に由来し、変化や変身をする意味を加えた用語であろう。時には「鴨老婆」や

「牙騙婆」とも書き、それぞれの原音を書く場合もある。たとえば貴州省のミャオ（苗）族の「ウーシエン（巫咸）」は、一説では人を食う大きな猩猩だと言い、一説では死んだおばあさんがたまたま生き返ったさいに変身して人を食う妖怪になったものだという。さらに中国の徐華龍氏は、トン（侗）族の旧正月やお盆のさいに「押老婆」を追い払う行事があることを挙げ、「老婆」は「鬼（亡靈）」の変身したものと思われるという見解を示している。⁽³⁾

また、江蘇省淮陰県の昔話に出てくる「老秋胡」の注釈では、この呼び名は地方によっては「麻胡子」、あるいは「麻祜」という隋煬帝のために運河を掘った麻叔謀をさすこともある、しかしこの物語のなかでは、しつぽがあつて毛深く、人を食う老女の妖怪である、とのべている。

マーフーツは、中国で泣く子を黙らせるためにおどす時に引き合いで出す正体不明の妖怪で、さまざまな漢字表記がある。その由来については、胡人のような風貌の凶暴な武将ということで歴史上に実在する人物にあてる説と（さきの麻叔謀もその一人）、ここで取りあげているような人を食う妖怪とする説の二系統がある。

すでに南方熊楠氏や柳田国男氏も、日本やヨーロッパの類例をあげて論じているし、ほかに、中国語の「模糊」とか「馬馬虎虎」という不明確を意味する表現と係わりがあるかもしれない、という星野孝司氏の説もある。⁽⁴⁾

いずれにしても、人を食う妖怪のイメージの不明確さと、その妖怪を呼ぶ名称の曖昧さとは、見合っているといえるであろう。

【<虎のおばあさん>型との上ヒ車交】

中 国	車月 魚羊	日 本
[エーバーハルト11虎と子ども/丁乃通 A T333C] (①~⑤の大区分は丁乃通、⑤の小区分と ⑥は飯倉による)	[崔仁鶴100 日と月 の起源]	[閏:大成245 天道さ ん金の鎖、同246 姉 弟と山姥]
①母親が子どもたち（二人または三人）に留守番をさせて出かけ（実家へ帰る場合が多い）、その途中で人食い（動物または妖怪）に食われる。 ②人食いは母方の祖母（中国語で外婆）（または母親）のふりをして、子どもたちのところをたずね、ごまかして家のなかに入る。 ③人食いは末の子と寝て、ガリガリと音をたてて食べる。 ④末の子の指を投げ与えられたりして、人食いと知ったほかの子どもたちは、小便にいくなどといつわって、その場を脱出する。（紐で結ばれるが、そこに身代わりの動物などをつける場合もある） ⑤(a)木の上に逃げた子どもたちが、追ってきた人食いを紐で引きあげてやるといつわり、途中でつき落して殺す。（木の近くに井戸や池があり、そこへ落とす場合もある。また⑥aにつながる場合は、当然死なない） (b)木の上に逃げた子どもたちが、下の人食いに果物をやるといつわり、開いた口に刃物などを投げこんで殺す。 (c)相手が人食いと知った子どもたちが二階に逃げ、酢などをたらして灯を消し、樽をころがして雷だとおどし、こわがって長持や箱に逃げこんだ人食いを熱湯で殺す。 (d)脱出した子どもが近所の大人の助けをかりるなどして、人食いを追ははったり、殺したりする。（そのほかの場合も、この頃にふくめる） ⑥(a)(一部に)子どもたちが逃げたあと、人食いがまた来ると言い残して去り、<老虎精>型の話につながる。 (b)(一部に)人食いの死体から白菜が生え、商人がその白菜(あるいは⑤cの長持)を買っていくと、娘たちや人食いに変身する。 (c)(一部に)人食いの死体が、イラクサなどの植物や蚊などに化生する。 (d)(ごく一部に)木から降りられなくなった娘が、結婚するから助けてくれと人に頼むがかなえられず、天に助けを求める。（日と月になる場合もある）	①~④動物が虎に限定されるほかは、中国とほぼ同じ。 ⑤追ってきた虎も、木の上に登る。油を塗ってすべり、傷をつけて登る。 ⑥子どもたちが天の神に祈ると、天から金の鎖がさがり子どもたちは天に昇る。 ⑦虎が祈ると、腐った鎖がさがり、虎は死ぬ。	①~④虎が山姥など（ほかに鬼、鬼婆、人食婆、目一つ五郎狼、虎）に変わらるほかは、中国および朝鮮にはほぼ同じ。（中国と日本では、細部の描写が似ている） ④の小便に行こうとして、紐をつけられ、柱に結んだりすることは<三枚の御札>に同じ。 ⑤~⑦虎が山姥などに変わらるほかは、朝鮮とほぼ同じ。
	⑧虎の血でモロコシキビが赤くなる。 ⑨天に昇って、兄は太陽、妹は月になる。	(中国の⑤(c)は日本の<牛方山姥>へ) ⑧山姥の血でソバの茎が赤くなる。 ⑨兄弟は月と太陽、または星になる。

〈虎のおばあさん〉型の話型分布図

<人食いから逃れた子どもの行方>

- ▣ 木の上に逃げる話(⑤a, ⑤b)
- ▣ 二階(あるいは天井)に逃げる話(⑤c)
- そのほかの結末をもつ話(⑤d)
- ▣ <虎の妖怪>型につながる話(⑥a)
- ▣ 木から天に助けを求める話(⑥d)



【<虎のおばあさん>型分布図の資料一覧】

略号 地域／民族 (省級・市県)	人食いの呼称 (漢語のま)	モチーフの異同(別表参照) ⑤ a b c d ⑥ a b c d	地図のマーク	出 典
A 吉林 / 漢	老虎媽子 ドラ	⑤ a + ⑥ a + ⑥ b	■+□	吉林民間故事選萃
B 遼寧 / 漢	老狼精 オガ	⑤ a	■	薛天智故事選
C 遼寧 / 漢	老狼精 オガ	⑤ b	■	姜淑珍故事選
D 遼寧・岫岩 / 滿州	熊狐精 ヒガ?	⑤ a + ⑥ a + ⑥ b	■+□	滿族三老人故事集
E 内蒙古 / モンゴル	「鬼婆」(臘研)	⑤ d	□+□	鳥居きみ子(日絵)
F 内蒙古 / 漢	紅眼狐狸 キツネ	朝鮮⑤+カササギの綱	■	天牛郎配夫妻
G 河北・望都 / 漢	大黑狼 オガ	⑤ a + ⑥ b +(蛇郎)	■	大黑狼的故事
H 河北・交河 / 漢	老母狼 オガ	⑤ a	■	民間文学1965-3
I 河北・藁城 / 漢	狼精 オガ	⑤ a + ⑥ a + ⑥ b +(蛇郎)	■+□	耿村故事百家
J 山西・靈石 / 漢	狼 オガ	⑤ a (死なし)	□	民間月刊2-2
K 山東・濟寧 / 漢	老狼 オガ	⑤ a + ⑥ a	■+□	換心後
L 山東・泰山 / 漢	狼妖精 オガ	⑤ a + ⑥ a	■+□	泰山民間故事大觀
M 安徽・歙县 / 漢	虎嫗 ドラ	⑤ a + ⑤ d	■	広慶初新志(1803年)
N 安徽・旌德 / 漢	狼外婆 オガ	⑤ b	□	民間月刊2-2
O 江蘇 / 漢	狼外婆 オガ	⑤ a	■	龍灯
P 江蘇・淮陰 / 漢	老秋胡 嶽	⑤ a	■	民間文学1955-8
Q 江蘇・揚州 / 漢	秋虎外婆 ドラ	⑤ c (虎に隠れ、熱湯で死ぬ)	■	民間月刊1-8
R 浙江・嘉善 / 漢	毛腿二娘 嶽	⑤ d	□	民間月刊2-2
S 浙江・紹興 / 漢	老虎外婆 ドラ	⑤ d	□	紹興故事
T 浙江・武義 / 漢	老虎精 ドラ	⑤ c (肚からかみを割られる)	■	虎話
U 福建・廈門 / 漢	狐狸精 キツネ	⑤ a + ⑥ b	■	民間月刊2-2
V 福建・漳州 / 漢	虎姑婆 ドラ	⑤ a (木箱(ねぐら)に)+雲に移る	■?	福建故事2
W 台湾 / 漢	虎姑婆 ドラ	⑤ b	■	エーバーハルト
X 江西・金溪 / 漢	老虎外婆 ドラ	(2脚目)⑤ c (虎に隠れ、火で焼かれる)	■	芸風月刊2-12
Y 河南中部 / 漢	狼外婆 オガ	⑤ a	■	河南故事集
Z 河南・唐河 / 漢	老丑虎 ドラ	⑤ a	■	馮沅君創作譯文集
AA湖南・攸県 / 漢	老虎外婆 ドラ	⑤ d	□	民間月刊2-2
AB湖南・衡山 / 漢	野人外婆 嶽	⑤ c (杖がけて倒かれる)	■	民間月刊2-2
AC湖南・湘西 / 土家	人熊家婆 クマ	⑤ b (鉄杖)+⑥ c (きのこ、⇒虱、蚤、蚊)	■	土家族民間故事選
AD湖南・湘西 / ミヤオ	豺狗子 ヤマイヌ	(7人の姫が斬り)⑤ c (日射打れる)	■	苗族民間故事選
AE広東・海豐 / 漢	老虎外婆 ドラ	⑤ d	□	鍾敬文采録印藏集
AF広東・韶州 / 漢	猪猪大姨 嶽	⑤ c (鉄杖に)⇒死ぬ)	■	婦女雑誌7-12
AG広東・広州 / 漢	熊人婆 クマ	⑤ c + ⑥ a	■+□	広州民間故事
AH広東・翁源 / 漢	瓢瓜麻 黙?	⑤ d + ⑥ a	□+□	民俗15·16
AI広西・柳州 / 漢	人熊婆 クマ	⑤ c (虎に駆使(せ)て死) + ⑥ c (蔓)	■	民間月刊2-2
AJ広西・紅水河 / チワン	奸耶(瞿) 嶽	⑤ c (巻きから杖を割げる) + ⑤ b	■+□	壯族民間故事選
AK広西・羅城 / ムーラム	婆孺 嶽	⑤ c (米俵に隠れ、燃いた金物と熱湯で死ぬ)	■	仫佬族民間故事選
AL広西・三江 / トン	鴨变婆 嶽	⑤ b	■	侗族民間故事選
AM四川・巴県 / 漢	熊家婆 クマ	⑤ c (虎に隠れ、熱湯で死ぬ) + ⑥ b	■	民俗72
AN貴州・黄平 / ミヤオ	巫咸(瞿) 嶽	⑤ c (長旗(ひなた)隠れ娘(めのわらわ)死物(しもの)で死ぬ) + ⑥ b	■(黒上)	阿秀王
AO貴州・黔輔 / ミヤオ	母老虎 ドラ	⑤ d	□	苗族民間故事選
AP貴州・独山 / 水	尼变(矮婆) 嶽	⑤ c (虎に隠れ、翻て死ぬ)	■	水族民間故事選
AQ雲南・河口 / 漢	山人婆 嶽	⑤ b + ⑥ c (ヒル、蚊)	■	民間月刊2-2
AR雲南・昆明近く / イ	猩猩 嶽	⑤ b + ⑥ c (イライ)	■	彝語語法研究

【<虎のおばあさん>型分布図の資料一覧】(つづき)

略号 地域／民族 (省級・市県)	人食いの呼称 (漢語読み)	モチーフの異同(別表参照) ⑤a b c d ⑥a b c d	地図のマーク	出典
AS雲南・劍川／白 AT雲南・(元陽)／ハニ AU雲南・碧江／リス AV雲南・麗江／ナシ AW甘肅／漢 [参考：朝鮮] AX咸鏡南道・咸興 AY慶尚北道・金泉	佑有把 嶺 苗老苗闇 嶺 老妖怪 猪 老母猪精 ワニ 野狐精 キツネ 虎 トラ 虎 トラ	⑤a +⑥c (行カサ) ⑤b +⑥d (行カサ)+嶺が月と太陽に ⑤b +⑥d (嶺)+木ごとに助けられる ⑤b +⑥d (独)+天の神が麻布で救助 ⑤a	☒ ☒ ☒ ☒ ☒ ☒ ☒	白族民間故事選 帽少數民族作品選5 傈僳族民間故事選 山茶1989-3 甘肅民間故事選 孫・朝鮮の民話 崔・朝鮮昔話百選

【<虎の女妖怪>型との比喩交】

中 国 [エーバーハルト14援助する動物/丁乃通 A T210] (A～Cは飯倉、Dは斧原による)	卓月 魚羊 [崔仁鶴54意地悪な虎の退治]	日 本 [関：大成25, 26, 27 A 猿蟹合戦、同29雀の仇討]
(A)<老虎外婆>型の話で、人食い（動物または妖怪）は母親と末の子を食い、ほかの子どもたちが逃げると、人食いはまた来ると言い残して去る。そのあとで、意外な組み合わせの物による助太刀の話が展開する。	①虎がいつも老婆の大根畑を荒らすので、ごちそうをするといつわり、虎を招く。 ②たのんでおいた協力者によって虎を退治。（火鉢の灰、水桶の唐辛子、拭巾の針、牛の糞ですべる） ③虎はムシロに巻かれ、背負子にかつがれて、海に捨てられる。	①(a)<猿蟹合戦>での猿（狐、兔）と蟹（雄）の共同耕作の不当な配分をめぐる葛藤は中国の話の前段には見られない。 (b)<猿の夜盗>は中国のB型にある程度対応する。
(B)一人暮らしの老婆が主人公で、これに危害を△加えようとする人食い（動物または妖怪）が老婆に同情した援助者たちの助太刀で、かえってやっつけられてしまう。 (そのほかの場合も、この項にふくめる)	(①③)の小異のほかは、中国のB型に近い)	(c)<雀の仇討>での山姥（鬼）が雀の雛と親鳥を食い、残った卵から生まれた雛が仇討ちにいく構成は中国のC型にきわめて近い。
(C)主人公と仕返しをする相手が、動物同士ある▲いは動物対人食い（妖怪）という構成のもので、動物昔話としての形をとっている。		(d)<馬子の仇討>は中国のD型にある程度対応する。
(D)上記以外の形で（財宝を取り返すためや仇討△ちのために）主人公（若い男性）が援助者たちを引きつれて、人食いを退治しにいく。	②援助者に団子や餅をあげることは、中国のごく一部にしか見られない。	

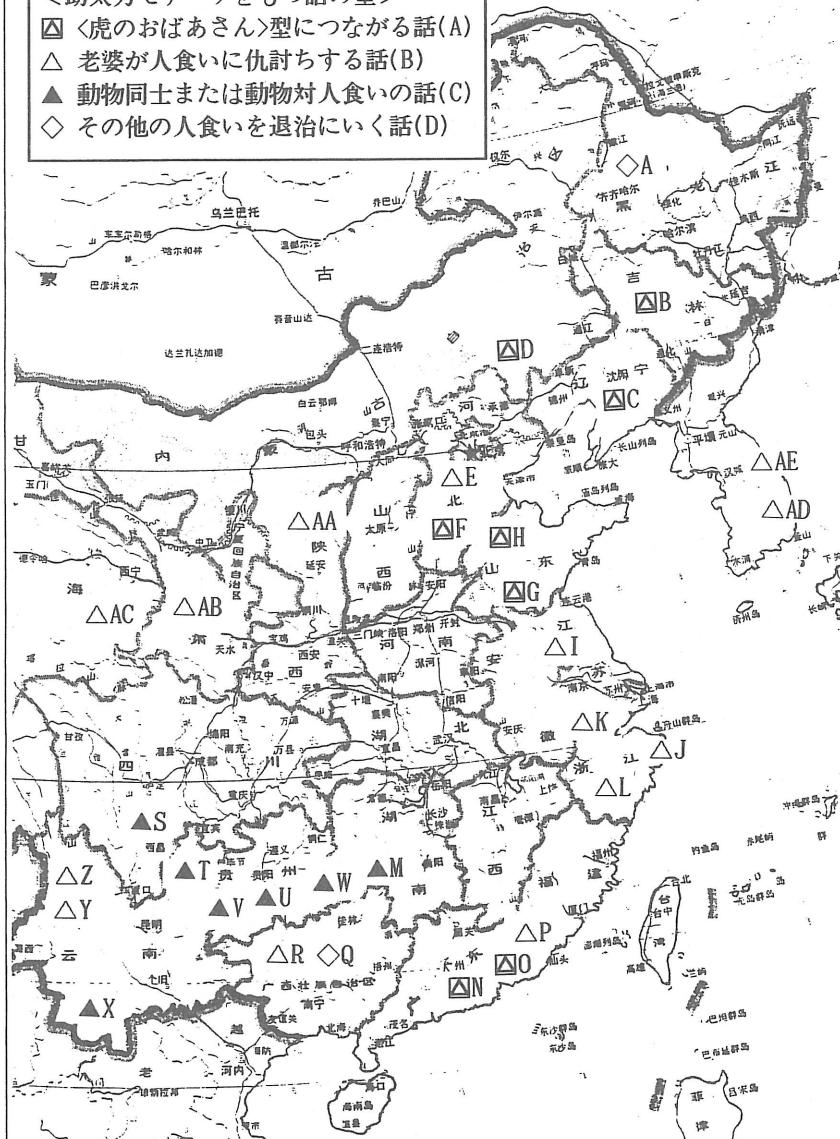
【<虎の妖怪>型分布図の資料一覧】

略号 地域／民族 (省級・市県)	人食いの呼称(漢語) <仇討ちをする側	援助する動物や物 (一部漢語) (援助の礼にあげる物)	地図 マーク	出 典
A 黒龍江／ダウル	蠍蓋(ヤバミ)<男の子	耳、目、錐、鶏卵、鮑、紅と白の棒、牛糞、ひき白	◇	達斡爾族民間傳説
B 吉林／漢	老虎媽子<子ども	針、爆竹、石臼	□	吉林民間故事選萃
C 遼寧・岫岩／満	熊狐精<子ども	鉄、鶏卵、錐、水蛇、ローラー、牛糞、簫	□	満族三老人故事集
D 内蒙古／モンゴル	「鬼婆」<子ども	卵、石臼、鉄、針、豚の頭(餅)	□	鳥居きみ子(日経)
E 河北・望都／漢	老虎 <老婆	紡車、蝎、爆竹、西瓜の皮、ローラー、蔓、ひき白(菓子)	△	大黒狼的故事
F 河北・藁城／漢	狼精 <子ども	針、蝎、紡車、蔓、鶏卵、西瓜の皮、ローラー(ギョーザ)	□	耿村故事百家
G 山東・濟寧／漢	老狼 <子ども	蝎、アヒルの卵、牛糞、洗濯棒	□	換心後
H 山東・泰山／漢	狼妖精<子ども	蝎、スッポン、鶏卵、ローラー	□	泰山民間故事大觀
I 江蘇／漢	老虎 <老婆	豌豆、鶏卵、蟹、丸太、青蛙、紡車、金槌	△	龍燈
J 浙江・余姚／漢	直脚野人<老婆	飴、針、スッポン、西瓜、田螺	△	婦女雑誌7-8
K 浙江・紹興／漢	老虎精<老婆	西瓜、蒲瓜、南瓜、蓮根、簫、アヒルの卵、針、ムシロ、飴	△	紹興故事
L 浙江・紹興／漢	野人精・老虎精・猢猻精<老婆	ムシロ、アヒルの卵、蟹、栗、南瓜	△	経緯民間故事
M 湖南・通道／トン	鳴交婆<ヒヨコ	栗、蟹、牛糞、トゲ、分銅、杉の切り株	▲	山茶1988-2
N 広東・広州／漢	熊人婆<子ども	針、油、蟹、鶏卵、サウビ、腰掛け	□	広州民間故事
O 広東・翁源／漢	獮瓜麻<女人	針、豚・犬、牛糞、青竹蛇、スッポン、鶏卵、砥石、金の物差	□	民俗15・16
P 広東・潮州／漢	猪哥精<老婆	針、豚糞、蛇、スッポン、蟹、鶏卵、井戸(掘る)、紙、牛、馬	△	菜花郎
Q 広西・巴馬／チワン	七鼻老妖<狩人の弟	冬瓜、蜂、脚板翠田人、青苔、額頭碰壁人	◇	壯族民間故事選
R 広西・凌雲／ヤオ	十嘴九鼻<若い男	青蛙、蜜蜂、蟹、唐辛子、竹鶏、竹の皮(肉の塩漬⇒蚊)	△	瑤族民間故事選
S 四川・涼山／イ	妖婆<ヒヨコ	針、砥石、蛇、峰、竹、魚、牛糞	▲	民間文学1957-5
T 貴州・威寧／イ	野猫(ヤマネ)<ヒヨコ	簫、繩、牛の糞、草叩き棒	▲	彝族民間故事選
U 貴州・黔輔／ヤオ	野猫(ヤマネ)<ヒヨコ	針、牛の糞、蟹、洗濯棒、栗	▲	苗族民間故事選
V 貴州・鎮寧／ブイ	黃鼠狼(イイハ)<ヒヨコ	蟹、丸太、栗、錐、牛の糞	▲	布依族民間故事
W 貴州／トン	黃鼠狼(イイハ)<ヒヨコ	アヒル、火吹竹、栗、犬	▲	侗族民間故事選
X 雲南・勐海／ハニ	野猫(ヤマネ)<ヒヨコ	苦子果、蟹、冬瓜、蜜蜂、牛糞	▲	哈尼族民間故事選
Y 雲南・碧江／リス	妖怪<孤児(カモメ)	冲天辣、龍竹の皮、アヒル	△	傈僳族民間故事選
Z 雲南・維西／リス	老虎<子ども	鶏卵、羊皮、馬鹿(訛=鶴)、猪大白蛇、金蝎、蛙、牛糞、ローラー	△	傈僳族民間故事選
AA陝西・吳堡／漢	毛野人<老婆	錐、鶏卵、蛙、牛糞、ローラー、麵	△	民間文学1986-2
AB甘肅／漢	野人婆<老婆	麿、鶏卵石、猴子(サル)+石+棒、牛毛繩	△	甘肅民間故事選
AC青海?／チベット	獅子(ライオン)<牧童(羊を食む)		△	民間文学1963-6
〔参考：朝鮮〕				
AD慶尚南道・馬山	虎<老婆	火鉢の灰、トウガラシ、針、牛の糞、ムシロ、背負梯子	△	孫・朝鮮の民話
AEソウル(?)	虎<老婆	(最後がロバとなるほが同上)	△	崔・朝鮮昔話百選

〈虎の妖怪〉型の話型分布図

〈助太刀モチーフをもつ話の型〉

- 〈虎のおばあさん〉型につながる話(A)
- △ 老婆が人食いに仇討ちする話(B)
- ▲ 動物同士または動物対人食いの話(C)
- ◇ その他の人食いを退治にいく話(D)



II <虎のおせねやぐ> 型との比較

この型は、AT123 「狼と子山羊」、AT333 「人食い（赤頭巾、六匹の子山羊）」に相当するもので、中国ではよく知られていて、分布地域も広く、採集例の多い話の一例といふ。

話の中心は、人食いが留守番の子どもたちを「まかして家に入りこみ、末の子といっしょに寝てから、ほかの子に指を投げ与えたりしながら食べる」くだりである。この部分では、日本の「天道さん金の綱」や朝鮮の「日と月の起源」も、ほとんど一致した展開となっており、とくに中国と日本では細部の描写までもよく似ている。末の子が食われているのに気づいたほかの子どもたちが、小便をしにいくと、そをついて外に逃げるさい、つけられた紐を身代わりの動物などに結びつけるところは、日本の「三枚の御札」で、山姥の家から脱出する場面ときわめて近い。

ただし、中国では「床神、門神、竈神」などを怒らせるから外で小便をすると言い、便所神（廁神）は出でこない。これは住居の構造や民俗神のあり方のちがいによるものであろう。
ところで、子どもたちが外に出て木に登ったあと天に助けを求めるという朝鮮・日本での展開のしかたは、中国とはまったくちがつてゐる。しかも朝鮮と日本がほぼ一致しているところからすると、この話は朝鮮経由で日本に到達した可能性がきわめて高い。『日本昔話事典』によると、〈天道さん金の綱〉は、青森から沖縄まで全

国的に分布するが、報告例の約半数近くが九州、南西諸島であるといふのも、参考となる。

中国の話のなかにも、一部に木の上から天に助けを求める例があるものの（分布図参照）、二つか三つの資料では、朝鮮・日本の筋立てにつながるものかどうかの判断もできない。

また中国の北方では、木に登った子どもたちが追ってきた人食い

を紐で吊るしあげて殺す話が大半をしめる。（おなじ紐が、一方では天につながり、ここでは地につながるわけだから、何らかの関係がありそうな気もするが、それ以上のことは分からぬ。）そのさ

い、人食いが井戸や池の水面に映った影で木の上の子どもたちを見つけ、さらに油を塗って登れとだまされるくだりは、「天道さん金の綱」にあるだけではなく、「牛方山姥」のなかにも出てくる。

ことに注目されるのは、中国の南方では、二階（あるいは天井）に逃げた子どもが、さまざまな手段で人食いをおどかし、長持や米櫃、釜、臼などに入った人食いを熱湯や火で殺す話がかなりあることである。初めにも指摘したように、これが日本の「牛方山姥」で山姥を殺すさいに、釜に入ったところを下から火をたくとか、木の唐櫃に入ったところへ熱湯をそそぐとかする筋立ての、もとの形かと思われる。唐櫃が中国式の長持であることも意味深い。

II <虎の妖怪> 型との比較

この型は、AT210 「ヤハドリ、メンドリ、アヒル、ピノ、針な

どの旅行（旅歩きの動物たち）」に相当するもので、特異な助太刀モチーフをもつてゐるために、「虎のおばあさん」型と並んで、中國ではよく知られている話である。

表にも書いたように、日本の「雀の仇討」で、雀の雛が山姥に仇討にいく筋立ては、中国の西南地方の少数民族に伝わる動物同士または動物対人食いの仇討の話型（表のC型）によく似ている。さらに〈猿蟹合戦〉の後半にあたる仇討の部分も、この動物昔話的な構成に近い関係にある。

また朝鮮の「意地悪な虎の退治」は、中国の沿海地方に広く伝わる話型（表のB型）に近いが、この話型はそのままの形では日本とは対応していない（後述のように、ある程度の対応があるという方もあるが）。したがつて「虎の妖怪」型の話についていうと、朝鮮では中国から伝わった一つの亜型があまり大きな変化をしないで語られている。一方、日本へは中国の別の亜型が朝鮮を経由しないで伝わり、さまざまに変形した可能性が高い。

表に示した「虎の妖怪」の亜型分類にD型を加えたのは、斧原孝守氏の調査にもとづく見解⁽⁵⁾によつたが、斧原氏はさらに小島瓔礼氏の教示によるとしながら、日本に伝わる「旅歩きの動物たち」の昔話の諸タイプのうち、C型に対応する「雀の仇討」のほかに、「猿の夜盗」はB型に、「馬子の仇討」はD型に、それぞれある程度対応していると指摘する。

このような亜型のちがいにもかかわらず、全体としてみると、こ

の「虎の妖怪」型の話には、資料一覧にも見られるように、閻敬吾氏がアジア型と呼んだ要素が、おどろくほど共通して伝えられている。栗、針、牛の糞臼などといった、独特な援助者たちのラインアップの印象は強烈である。

しかし、「虎の妖怪」型の話に出てくる人を食う妖怪は、まったくと言っていいほど「虎のおばあさん」型と共通しているため、ここであらためてはふれない。分布図を見れば分かるように、「虎のおばあさん」型の話と結合して語られる場合も、一つの亜型としてあつかえるほど多い。

なお、本稿の主題とは直接にはかかわらないが、日本の「猿蟹合戦」前半の食物争い譚が、どこで助太刀モチーフと結びついたかについて、斧原孝守氏が興味ぶかい推定をしている。

中国の浙江省（上海の南にあたる）で採集されたと思われる昔話に、日本の「猿蟹合戦」そっくりに、猿が蟹の握り飯を取りあげて桃の種と交換し、あげくに実がなるとまた一人じめにして、両者の争いを招いたという話がある。また台湾の高山族にも、猿と蟹が果実をめぐって争う話があり、このような「作物の分配」譚が東アジアに広く伝わっていた可能性があるという。

斧原氏はさらに、中国の広西チワン族自治区北部のムーラム族に伝わる猿が兎と桃をめぐって争う話をあげ、この話の後半にはリスやセンゼンコウなどが協力して猿に仕返しをする筋立てが結合している。もしかすると、中国の中南部では、すでに猿と蟹の果実争いの譚と結合した形で「旅歩きの動物たち」の話が伝わっていた可能性

があるのではないか、と推定している。

おわりに

いても、民俗や信仰の側面からの検討が不可欠であろうし、昔話のなかの役割だけを一面化して理解してはならないだろう。さらにアジア全体の伝承からとらえなおす観点も視野に入れて、今後も問題の整理を進めていくことにしたい。

以上に見たように、中国の「虎のおばあさん」と「虎の妖怪」という二つのタイプの昔話は、日本では「天道さん金の綱」や「旅歩きの動物たち」群の話に語りかえられた。「牛半山姥」は、中国にそのままの形で対応する話はなさそうだが、「虎のおばあさん」の亞型に重要なモチーフの来源があった。

その主要なキャラクターである人を食う妖怪は、中国ではさまざま呼び方をされて地域的な特色をもつていてもかかわらず、日本ではほとんど山姥に置きかえられた。

そして、これらの山姥の登場する逃走譚は、個々の話型の対応で比較するよりは、山姥をキャラクターとする昔話のグループとしてあつかった方が、はるかに有効であることも分かった。グループ内でのモチーフの移動がかなり自在になされていることは、いくつかの例を挙げたとおりである。

とすれば、この程度の材料で、日本の山姥は、中国人を食う妖怪、とくに「老婆」系の移入だと判断するのは、まだ性急にすぎるかもしれない。中国についても、ここに取りあげた以外に人を食う妖怪の登場する話が多いし、日本にいたってはなおさらである。

日本の山姥については、吉田敦彦氏の最近の仕事のように、そこに古い伝承の投影をよみとろうとする研究もある。中国の妖怪につ

【注】

- (1) 「天からさがる縄—中国の『老虎外婆』と日本の『天道さん金の鎖』」(柿の会月報十一号、一九六〇年)、「中国の猿蟹合戦」(民話十二号、一九六〇年、未来社)、「人を食う老婆」(昔話に見る中国と日本) (世界の国シリーズ十六・中国、一九八二年、講談社)、「中国の『三天童話』と日本」(民話と文学十八号、一九八七年)、以上。

- ほかに、池田(松岡)正子「中国の赤頭巾昔話」(中国民話の会会報III一九号、一九七八年)、斧原孝守「中国の猿蟹合戦」(譚)(比較民俗学会報一三一、七十七号、一九九二年)。

- (2) 中野美代子『中国の妖怪』(一九八三年、岩波新書)、周正『中国の『野人』』(一九九一年、中公文庫) 参照。
(3) 徐華龍「老婆考」(中国民間文化一集、一九九一年、上海)
(4) 星野孝司「マーフー——虚像の怪物たち」(中国民話の会通信一十三・四号、一九九二年。例会発表の要約)。
(5) 斧原孝守論文は注1参照。